

Title	思考の座標軸 : 「グローバル化」との関連で
Sub Title	
Author	宮島, 喬 (Miyajima, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.特別号『将来編』 (2003. ) ,p.16- 20
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	創設50周年記念特別紀要 第1部 基調報告3
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-000S2003-0016">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-000S2003-0016</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

制度はアンダーグラデュエイトというのはカレッジであり、またファカルティでもある、そういう制度だったのではないか。これが新制大学というものだったのではないか。その上の専門教育は、ロー・スクールなり大学院というところでやるんだ。こういう制度こそ今の——その当時ですから 500 近くある——大学というものをつくった精神だったのではないか。我々はそれを思い違いをした。旧制大学の発想のままで新制大学を出発させてしまった。このことをもう一度考え直す必要がある。」

大学基準協会の機関誌にその論文を発表しておられます。これは当時としては非常に珍しい論文でした。それを読む前から私は、奥井先生という方が、大学基準協会において戦後の「大学通信教育の父」といわれていることを知っていました。戦後の新制大学に通信教育が発足したときのその恩人は、当時経済学部長であった奥井先生なのです。そこまでは知っておりましたが、この大学論との関係で見ると、考え方の根はそういうことだったのだなと思います。今、それが見直されているわけです。私は、これから、21 世紀の半ばぐらいになった頃、日本の、アンダーグラデュエイトの教育は恐らく全体としてはリベラル・アーツ型になって、その上のほうで専門性を志向した緩やかな専門教育が行われ、やがてその行く先は大学院につらなっていく。しかもその大学院でもリベラル・アーツ型の部分が忘れられてはいない。恐らくそういうような大学像になっていくだろうというふうに考えます。

そういう目で見まして、こちらの社会学研究科がどうやらまだ全体として慶應義塾の中の例外的な存在で、いらっしゃるらしいことは悲しむべきことだと思います。もっとこれが先駆的な例として全学に広がるほうがいいと思っております。ちょうど時間になりました。ありがとうございました。(拍手)

司会(杉浦) どうもありがとうございました。

### 報告 3

司会(杉浦) 報告 3 を、宮島先生、よろしくお願いたします。

## 思考の座標軸

——「グローバリゼーション」との関連で——

宮 島 喬

(立教大学教授)

宮島でございます。客席にいらっしゃる皆さんの中に、昔お目にかかった方がかなりいらっしゃるので、大変懐かしく思っております。一時期、15 年間ぐらいでしようか。慶應大学の社会学研究科に非常勤としてお世話になりました。大変いい刺激のあるゼミを持たせていただきました。現在、立教大学では社会学研究科の後期課程の課程主任をやっておりまして、博士論文をどのように書いてもらうかということで本当に頭を痛めております。きょうは、そういうことよりは社会学の内部に入ったお話を、社会学のアイデンティティとは何だろうかということ、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

全体に大変仰々しいテーマを掲げました。「座標軸」という言葉では、佐々木先生と何か似たタイトルになりましたが、社会学的な思考の原点を考えてみようということが一つの目的であります。ただし、これは一般的、抽象的ではなく、最近議論が非常に行われておりますグローバリゼーション、との関連で考えていることをお話ししてみたいと思っております。今、流行語の一つになっているグローバリゼーション。一体、グローバリゼーションというのは事実なのか。あるいは必然的な趨勢なのか。抗しがたい文明的な力のようなものなのか。こういう点になりますと、そう思っている人も結構多い。しかし、果たしてそうなのかという点では疑問が直ちに湧いてくるわけあります。インターネットの技術でとか、あるいは光ファイバーによって地球上を覆ってしまうとか、あるいは衛星をもっとたくさん打ち上げて衛星放送、テクノロジーでもって情報における格差をなくすとか、いろいろなことが言われておりまして、そういう方たちの話を聞きますと、確かにグローバリゼーションというのは地球を小さくし、まさに我々を地球の中で時間、空間を克服した関係を瞬時にして持たせてくれるかのような、そういうイメージに誘われていきます。

しかし考えてみると、いろいろ両面性のあることに気が付きます。例えば、つい昨日かきょうの NHK のニュースで、オーストラリアのタスマニア島で蕎麦をつくっているという話を聞きました。タスマニア島という

のはオーストラリアの更に南の大きな島ですけども、ここで日本向けの蕎麦をつくっている。もちろん日本の商社が持ち込んだわけでしょうけども。この話を聞いて、ああグローバル化だなと思う。地球規模で蕎麦の栽培も行われるようになった、と。

これは逆に考えると、日本人のために蕎麦を栽培しているわけですから、日本人とは実に今日に至っても蕎麦という特殊な食べ物に執着して、ある意味で実にローカルな存在だということも思うわけです。タスマニアで蕎麦をつくったり、日本人が食べるためのネギが中国でつくられたりということ自体がグローバル化でもあるけれども、同時にローカルな日本人というものが、そこで培り出されてくる。そういうことも意味しているわけでありませう。

グローバル化に対する厳しい批判の中には、これは多国籍企業が戦略として作り出した言葉である。あるいは、WTO（世界貿易機関）が自由貿易によって世界の貿易秩序をつくり上げていくという、そのWTOのイデオロギーであるとか、そういった言い方があります。あるいは、マスメディアが作り出した言説だという批判もいろいろあるわけです。

「グローバル化」という言葉をそういう形で恰も普遍的な現象であるかのように議論をする。それも社会的に意味のある概念であるように議論するという傾向、これはやはり一つの構築主義的な営みの結果、つまり、構築されたものという感じがしてならないわけです。それは一体本当なんだろうかとという目で見てみる必要もある。

実は今から20年ぐらい前に、主にヨーロッパの、いわゆる少数民族のレベルで「民族の再生」という現象が注目されました。「エスニック・リサージェンス」（民族の再生）という言葉がヨーロッパでも言われ、そういった傾向を紹介する形で自分の仕事をしたことがあるんです。

このとき、例えば、「フランスの中で特殊な言語と言われているブルターニュ語が学校で教えられるようになり、ブルターニュ的なアイデンティティを主張する運動が起こってきた」というふうなことを書いたりもいたしました。

そういうときに私が使った言葉は、「ディファレンシエーション」とか、「ローカリゼーション」なんです。つまり、分化とか、局地化。そういう動きが私の目にはとまったわけです。あるいは、同じ年代のことになるのですが、1967年でしたか、イギリスで「ウェールズ言

語法」という、ウェールズ地域では英語とウェールズ語は同等であるとする法律ができて、ウェールズの地方で幼年学校から始まってウェールズ語の教育が行われるようになった、というニュースもありました。実際、今、ウェールズに行くときウェールズ語で、若者たちは結構自己表現できるんです。

それから、カナダだとケベック州が1974年フランス語憲章を制定してフランス語を唯一の公用語にするというふうなことをやった。

更に、時間は飛びますけれど90年代の日本で、これはどう解釈するかが難しいですが、「沖縄独立論」のような議論が起こってくる。

こういう現象の背後にグローバル化があるということは、自分でもかなり意識はしていますが、しかし、社会的には、やはりローカリゼーション、あるいはディファレンシエーションの面を注目したいということで、これまで仕事をやってまいりました。

少なくとも私のヨーロッパ研究では、「分化」という言葉を先にと使ってきたわけでありませう。ただし、その背後にヨーロッパ統合があるということは言っていました。ですから、統合——一種の均質な空間をつくるという意味での統合ですが——と、そういう分化的な局地化とが同時進行的に起こっているということなのです。

とかく、グローバル化と言いますと、世界がどんどん仕切りのない平坦な、あるいはのっぺらぼうな世界になっていくというイメージがあるようです。しかし、人間というのは独自の分化した意味世界を主張したり、特定の空間の中で自己決定のできる空間を必要とする。そういう点は何か基本的な人間の条件ではないかという感じがするわけです。分化的意味世界、あるいは自己決定的な空間な追求ということでもあります。

そしてもう一つ。これは現実に起こっている世界の動向の問題とやや次元が違いますけども、社会学の認識論の問題として言いますと、絶えず認識の上では様々な分化した概念、あるいはコンセプトを持つことによって、恰も均質であるように言われてきた現象を区別していくという必要です。これは常に言われてきたと思います。その代表的なものとして、例えば、ジェンダーとかエスニシティへの注目があります。1970年代までは、男の世界、女の世界があるということを社会学ではほとんど論じることはなかった。ですから、「日本人は……」といって日本人のことを論ずれば、その中に男性も女性も両方含まれますけども、実は男性のみをイメージし、

それを特に意識する必要は特に感じなかった。あるいは、「日本人は……」というときに、その中に 70 万人ぐらゐの朝鮮民族の人たちが含まれていたかもしれないが、それも意識されなかった。

しかし、70 年代以降の社会学においては、ジェンダーや、あるいはエスニスティの視点は、もう無視できなくなってきた。それだけに、例えば、労働の研究にしても、人の移動の研究にしても、宗教や、犯罪の研究にしても、ジェンダーの視点とか、エスニスティの視点というものを導入しなければならなくなっています。そういう意味では、認識論の次元でも、やはり分化ということは重要な我々の課題になってきているわけです。もちろんその上に立った総合が必要ですけども。

グローバリゼーションの議論をするときに、現実には起こっていることの中に、世界化、地球化とともに局地化があり、分化があるということを知らなければなりません。あるいは我々の認識論の問題として言えば、均質化してしまうのではなくて、そこを分化させて捉えるということ、そういうことです。その重要性も、最近、我々は認めてきたのではないかと思います。そういう意味で複眼的な見方、視点は重要だと思っているわけです。

社会学の創成期のことをちょっと振り返ってみますと、19 世紀のヨーロッパの市民社会の批判的な考察の一つの視点として社会学が成立したということはよく言われます。批判的と言っても、この中にはマルクスのような存在から、コントのような立場までありますけれども。

一つ私が今ここで思い出すのは、19 世紀の半ば頃に社会学が自己を主張し始めたときに、社会学が最初に批判的に対象化したのは古典派経済学の認識です。というのは、当時マンチェスター学派というふうに言っていました。スミスであるとか、フランスにはドン・モリナリという自由主義的な経済学者がいました。こういう人たちの社会は、国家、国民あるいは文化とか、そういうものを捨象した抽象的な市場社会でした。これを想定して議論を進めていく。この古典派経済学のやり方に対して、まずコントが批判をしまして、そして続いてデュルケムも批判をする。

ドイツの場合には歴史学派の社会科学の流れがありまして、これは国家とか、民族とか、歴史とかというものを捨象した経済学の理論は無意味だということから、歴史的なものを導入する。その歴史主義の、いわば末端にマックス・ウェーバーが位置しているわけです。

そう考えてくると、19 世紀に社会学的な思考が成立

したときに、ボーダレス的な市場社会の認識ではだめだ、ということを経済学者は言ってきたという感じはするわけです。そんなことを、今、思い出しますと、社会学は単純なグローバリズムの図式には抵抗してきて、そこに何か一つアイデンティティを求めたのではないかという気がするわけです。

例えば、エミール・デュルケムは、人間の生に意味を与えてくれる集団的なものを非常に重視しました。その集団的なアイデンティティが重要であるという見方です。『自殺論』(1897)などでは生に意味を与えてくれるものとして所属集団の重要性ということが強調されています。ウェーバーにとっては、少し違いますが、やはり、国家、政治共同体としての国家を前提にし、その責任ある統治、あるいは責任ある政治指導を強調して、そこに社会学の意義というものを認めていた。

そのなかで言うと難しいマルクスは、ある意味ではマルクスは、グローバルな視点を持った人です。ただマルクスが我々に残したことは、階級分化、あるいは階級対立という視点から市場社会の別の面を読み取るということです。と同時にアイルランド問題であるとか、インドの問題等を通じて、今で言う発展途上国とその植民地との間の構造化された従属関係を取り上げた。そういう分化あるいは、その結果としての分化による構造化を問題にしたという点で、それなりに社会学のアイデンティティを代表していると思うのです。

実際、デュルケムなどは、社会内存在としての個人の生活世界を常に捉えようとしていたと思います。そこに自分が依拠することのできる集団、価値というものがなければ、人間は生の衰弱に陥ってしまうんだという、そういう感覚が、『自殺論』なんかの中には非常に強烈にあるのです。こういうところに、グローバル化した社会の中で人間は生きられるのか、という問いはあったらうと思います。

そういう社会学のアイデンティティを今日引き継いでいる者として、先程、佐々木先生からもお話が出ましたが、ブルデューのような人がおります。ブルデューは、こういう論じ方をしています。一つの社会を均質的なものとして丸ごと論じてはいけぬ、その中で、サブグループがどのように構成されているかを常に明らかにせよ、と。これはかれのゼミナールの中でも繰り返し言ってきたわけです。一つの社会の中にはクラス・ディファレンシエーションがあるはずだ、人間には出身地による違いがあるはずだ、農村出身と都市の出身とで違いはあるはずだ、と。

これはマルクスの伝統の継承かもしれませんが、階級、階層、ジェンダーを重視します。ブルデューはジェンダーも重視するのです。そういうものに視点を下ろして問題を識別しながらとらえよ、ということです。こういった点は、均質化的認識傾向の強いグローバル化論に対しては、やはり一つのアンチテーゼをなしているのだらうと私などは思います。

今日、多国籍企業がつくり出すグローバル化現象がいろいろなところで見られるわけで、「マクドナルド化」といったことも言われますし、同じマークのクルマが至る所で走っているということも言われます。

昨日まで神戸である小さな国際シンポジウムがあって参加してまいりましたが、そこでドイツ人のある研究者が、「デュッセルドルフの日本人」という主題の面白い報告をされたのです。デュッセルドルフというのは、ご存じのように日本人の一番たくさん住んでいるドイツの街で、人口50万ほどの街に5,000人の日本企業の駐在員とその家族が住んでいる。それもオーバーカッセルという、ある地区に非常に集中して住んでいるわけで、そこに行くとき日本のものが全て揃っているとされる。これについてドイツ人の研究者は報告しまして、「日本人もまた移民と同じようにドイツの中にエスノスケープをつくり出した」と述べました。「エスノスケープ」というのはあるインド人の社会学者のつくった言葉です。先進国への移民の流れはずっと続いてまいりましたが、移民たちが、それぞれの先進国の中で自分たちのコミュニティをつくる。そしてその中で自分たちの要求を満たし、相互扶助をし、暮らしているので、ある地区に行くと、まさにエスニック・ランドスケープが展開する。こういう意味で「エスノスケープ」という言葉を使ったのです。これは一般には途上国出身の移民たちに対して言われる言葉ですけれども、実はデュッセルドルフの日本人もそうだと言われた。

日本の企業が多国籍企業として世界的に展開する、もう国境はない、どこにでも進出していく、という。しかしそれに伴って日本の駐在員たちが移動していくときに、彼らはどこにでもディアスポラとして出ては行けないので、やはり1ヵ所にかたままって住んでしまう。ドイツ語がしゃべれないというのが一つの理由らしく、ロンドンなんかだともう少し拡散してくるんですけども。とすると、片方で企業の多国籍化は進んでいますが、日本人がドイツ語をそう簡単には使えない、フランス語もそう簡単には使えないということになれば、彼らはかたままって住む。村をつくる。デュッセルドルフのその地区

は「ヤーパンドルフ」（日本人村）と呼ばれるわけです。文化を担った存在で、自分の身体の中に歴史や文化が刷り込まれている人間は、グローバリゼーションが進んでも簡単にどこへでも移動できるというわけではないということです。

ここで最後の主題に移りたいと思います。

今、グローバリゼーション批判が最も目立っておりするのは、先程佐々木先生からもお話がありました、フランスであるようです。先程言いましたブルデューや、有名な学者ですが、分類するのがなかなか難しいエマニュエル・トッド、アンドレ・タギエフ、それから、政治家のジャン・ピエール・シュベヌマン。こういう人たちがここ数年展開している議論は、グローバル化というのは恰も必然的で普遍的なことであるかのように言う人たちがいるが、これは多国籍企業や、WHOや、マスメディア、EUの自由主義的官僚たちがつくり出した言説であって、市場原理の万能を言うもので、それが結局は、失業や、福祉の後退や、貧富の差の拡大や、文化の画一化などを結果してきた、と。

ブルデューは更に、社会的な苦しみを世界的規模で広げていると言っています。かれは『世界の悲惨』、という本をはじめ、フランス社会の底辺の人々のことを90年代になるとずっと書いてるわけです。そして彼自身、「私は失業など多くの苦しみを抱えた弱者に目をつぶることはできない、だから、そういうグローバリゼーションと闘うんだ」ということを言っているのです。

これだけ聞きますと、考え方としてはやや古いのではないかと感じる方も多と思います。あるいは、グローバリゼーションに何もかも押し付けて悪玉にしている、と。私もそう感じないではありません。あまり分析的な議論にはなっていないものですから、そんな感じもする。しかし、社会学とは何かという、そのアイデンティティに彼は忠実であるから、先のような発言もせざるを得ないのではないかとも思われます。社会学のアイデンティティからすれば、グローバリゼーションの社会的帰結を論ぜざるを得ないのでしょう。

ここから先、私には気になることがあります。それは、ブルデューも、エマニュエル・トッドも、国家こそが人々に保障を与え、その文化をサポートし、人間的連帯をつくり出せるというふうには言っている。国家が前面に出てくるんです。これに同調する知識人は、意外にフランスでは多いんです。ドイツでもグローバリズム批判はありますが、必ずしもそうではない。フランスでは知識人の中に、意外に国家が頼りだということを使う人が多

い。

そこで、言わんとするところは、身近な民主主義が大事だということで、また、フランス革命以来のフランス国家というものに対する彼らの肯定的な評価もあるわけです。ただ、ここで国家を持ち出してしまうと、これはやはりヨーロッパの中では、先進国中心主義だという批判が出てきます。今のヨーロッパの中には発展途上に近いような国もあるし、そういう国から見ると、これはまた問題なんです。

知識人の中に、一種の国家擁護論が出てきたことについては、よそのヨーロッパの国からは皮肉にみちた、「左派知識人国家主義」という批判も出てきています。

私はこの点については、次のように考えます。国民国家を乗り越える、あるいはその問題点を乗り越えるという、非常に困難な努力の末に EC や EU の体制がヨーロッパではつくられてきた。ナショナリズムの偏狭さを乗り越えることには相当に努力がされてきている。また、グローバリズムの下でといいましょうか、強者の論理が出てくることをできるだけ抑えようという努力も行われてきて、そのための、富の再配分のシステム（「ヨーロッパ地域開発基金」などの構造基金）が機能しております。そういう点からすると、EU という組織は、これまでのいかなる国際組織に比べても平等、ジャスティスについては意を払ってきているわけです。したがって EU の内部からの改革ということを言わずに、国家に戻ってしまうのは、安易な後もどり、思考の放棄ではないかという感じがしてならない。

フランスのグローバリズム批判については、社会学のアイデンティティに照らし共鳴する面もありながら、同時にどこかで思考の回路が閉ざされているのではないかという感じがしてなりません。

結論として何を言うべきか。社会学は本来の発想からして、人々の社会的なアイデンティティ、あるいはアイデンティティに関わる生活世界のあり方に関心を持ってきたし、自らで決定しマネージできる社会空間を持つことこの必要を強調してきました。そして社会の中のサブグループや、その差異とか格差の問題にも目を向け

てきたわけです。ですから、そうした関心から離れることはできないし、離れるべきではない。

そして、まさにその観点から現代のグローバリゼーション論との対話をしなければいけないのではないか。現実には起きているそのグローバル化の現実を、否定することはできませんが、ただ、それをどの程度、どう複眼的に見るかということです。EU のような、国家を超えながら、しかし、その中にある秩序を実現しようとしている試みに対しては社会学は、もっと肯定的に考えていいのではないのでしょうか。批判的な知であっても、国家というパラダイムに戻ることは、ヨーロッパの場合にはあまり賢明ではないと思います。もっとも、この点に関しては、日本などの場合、周囲を見ても東アジアの中で地域統合を進めていくということができない状況にあり、残念ながら選択肢はありません。

最後に、「人間が社会的に生きるとは？」ということ、「その条件とは？」ということを私なりに考えてみました。文化的充足、つまり教育です。また身近な民主主義、そして有効な民主主義の必要性ということ強く感じております。こういうことを今一度確認することを通じて、19 世紀の中葉に成立した社会学的な思考が 21 世紀の新たな段階で、その状況に適応した形で、そのアイデンティティを維持していく。そういう必要を感じております。

私自身もメディアのグローバル化の恩恵はいろいろ受けているわけで、専門に研究しているヨーロッパのことを知るのに、よく BS ニュースを見ています。確かに以前と比べ、はるかにたくさん情報が入ってきたという感じがして、ありがたく思っています。しかし、同時に、BS ニュースを見たために、ああ、これでもう現地に行かなくてもいいんだなんて思うところがありまして、それは非常に問題だとは感じております。やはりグローバル化に支配されているという面があります。自分の足で歩いて、物を見てという、そういう認識の努力は大事にしていかなければいけない。

まとまりのない話をいたしましたけども、これで終わります。ありがとうございました。（拍手）